

# 円成寺庭園で庭の見せ場「景趣絶佳」を探る

林 秀 樹

## 1 心地よさと造園作庭技術

持続的発展が可能な社会の実現をめざす SDGs。そのための技術に求められているものは、人びとの心地よい安心である。特に建築や都市計画などの技術では合理性だけではなく、人びとの暮らしに密着した安全安心な技術が求められている。

日本庭園は、石燈籠などの添景物の製造、飛石や石組みの配石、庭木の植栽・育成・剪定と多種多様な技術が必要である。しかし、それだけではない。日照や風向き等にも配慮し、心地よい空間を構成することに腐心するのである。その地で培われた伝承や文化などの民俗学的な知識を求められることも多い。

これまでの庭園調査でわかってきたことは、庭は単に美しく飾るだけでなく、安心安全を求める人びとの秘められた思いが隠されているということである。

そのため、本稿は技術的観点からだけでなく、作庭に関わる庶民信仰などの分野にも言及した報告になっている。ここで展開している推論は民俗学的知見の少ない筆者の思い切った推論であることを予めお断りをおきたい。

## 2 日本庭園の景趣絶佳

存亡の機に瀕する地方の日本庭園を「見せ場の喪失」という観点から述べてみたい。

これまでの庭園調査で、「出雲では庭園の最大の見せ場には石燈籠が据えられている」と述べてきた。「庭の一番の見どころはどこか」を探り紹介してきたつもりである。

見せ場を見つけられなくなると、庭の魅力は半減してしまう。見せ場の大切さを強調するため、本稿から「景趣絶佳」という四字熟語を使うこととする。

ここでは松江城を築城した堀尾氏とゆかりの深い円成寺庭園に着目し景趣絶佳を探って見たい。

この庭には来待石造では現存最古といわれる「六角地藏燈籠」が据えられている。来待石造としては唯一無二の意匠を持つ石燈籠を中心に据えた庭づくりについて「忘れられた風趣絶佳」を考えて見たい。



左 出雲流個人庭園(奥出雲町)  
中門から眺める一幅の絵画 唐金形石燈籠  
右 八雲本陣庭園(松江市宍道町)  
客間 正座から眺める織部形石燈籠

### 3 景趣絶佳は風光明媚

日本庭園の見どころを賞賛する時、風光明媚より景趣絶佳が良いと考えている。

庭園を案内するとき、「庭の一番の見どころはここ」と言っても、人びとの感性に訴えるインパクトが弱い。良い表現はないかと調べていたら「景趣絶佳」という四字熟語を見つけ出した。

一般に景観分析をするときなどに、美しい景色が臨める場を View Spot と表現する。これは単に視点場を意味する言葉で、見どころを示すものではない。英語で多用する Beautiful Spot、Sightseeing spot のよい日本語訳を探ってみた。

日本語では、美しい景観を表現するとき「眺望絶景」「風光明媚」などを使うが、いずれも野外で広く見わたす場所の美しさを表現するときのものである。広場の大きな噴水や樹形の整った街路樹を見て、「風光明媚」などとは言わない。

庭園においても回遊式の大名庭園などの絶景は、風光明媚といっても良いだろうが、一般的な寺院庭園や個人庭園では違和感がある。やむなく、庭の景観構成上最も重要視している場所を「見せ場」と表現してきたが、残念至極であった。

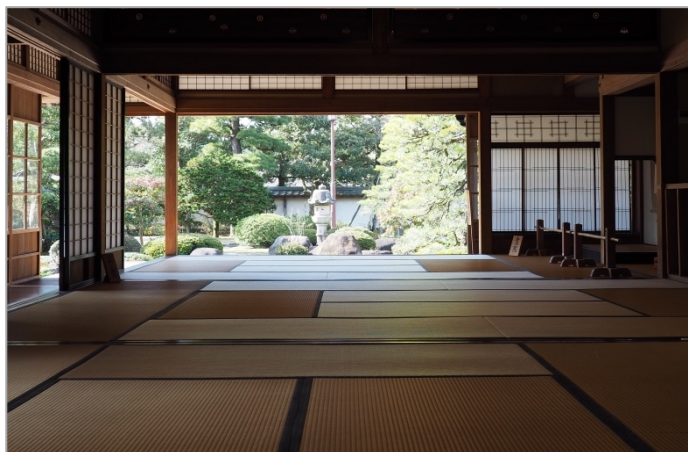
四字熟語は、「一石二鳥」「温故知新」など馴染みも深く、呪文めいた言葉ではあるが、人びとの心に響く。風光明媚などのような四字熟語の中で、庭園の美しさを表現として「景趣絶佳」が耳あたりが良い。

庭園の調査研究を続けていると、出雲流庭園のような小規模な座観式庭園にも庭を眺める一番の「見せ場」が隠されていることが解ってきた。これまでは「出雲では庭園の最大の見せ場は石燈籠が据えられている」とか「短冊石と駕籠置き石を一度に見ることができる場はここです」などと表現していたが、「景趣絶佳の石燈籠」とか「ここから見る短冊石と駕籠置石は景趣絶佳」と言えば、心に響き、庭への興味が増すのではと考えている。

出雲流庭園の景趣絶佳について簡単に述べる。この庭には二種類の景趣絶佳がある。

- ① 屋敷を訪れた人たち誰もが容易に眺める景趣

土間(白庭)から庭を遠望すると、広がり感はないが石灯籠を中心に一幅の絵。主木クロマツや短冊石、駕籠置石など庭の主役を見ることができない。



出雲文化伝承館の景趣絶佳  
上:土間からの景趣⇒皆が容易に眺められる  
下:客間の正座からの景趣⇒正客だけが眺められる

② 客間（おもて）に通された客(許されたもの)だけが眺める景趣

客間から眺めると庭の広がり感を楽しむことができる。床の間を背にした正座の主客だけが主木クロマツ、巨大な駕籠置石、長台な短冊石の全景を見る。

#### 4 圓城寺庭園の景趣絶佳

圓城寺庭園の景趣絶佳は、客殿の正座から眺める六角地藏燈籠である。北東の蓬莱石と燈籠に隣り合わせた井桁も庭の景趣を引き締める。

2021年6月技術士会の庭園調査の一環で圓城寺庭園を拝観した。これまで拝観調査した寺院庭園とはおもむきが違うところもあるが、庭の中心に石燈籠が据えられている庭の意匠は、出雲市の康國寺庭園や雲南市の峯寺庭園と似かよったものとなっている。しかし、この庭の石燈籠は他では見ることのない希有の意匠を持つ。来待石造では唯一無二の石燈籠である。



正座から石燈籠を見ると竿に陽刻された地藏尊とともに太陽と月の文様を透かした火袋を見ることができる。火袋は普段見慣れた南中した月を透かす文様とは異なり、月の影の部分が上となっている。上弦月が没する直前か、下弦月が出た直後である。謎深い意匠であると感嘆した。

圓城寺庭園の丁寧な観察すると、出雲の庭園様式を踏襲しているところもあるが、この庭特有の意匠も多い。

唯一無二の石燈籠六角地藏燈籠。この石燈籠は、平成8年3月松江市指定文化財（工芸品）に登録されており、慶長9年(1604)の紀年名を確認したとある。来待石造では最古のものである。

今回調査したところでは、陽刻された地藏の下段に文字が彫られていることは確認出来るが判読できない。25年経過して、風化が進んだのであろう。

本稿では、この六角地藏燈籠に焦点を当て謎多き圓城寺庭園の不思議を探っていくことにする。

#### 5 圓城寺庭園の成り立ち

圓城寺は、松江城を築城した堀尾家とゆかりが深い寺である。松江城を背にするこの寺は、城の真南に位置する。山に阻まれ庭から城を見ることはできないが、寺の裏山に上がれば天守閣が遠望でき、城からも圓城寺の躰を臨むことができる絶好の場所に建立されている。

松江城は、北東の鬼門には千手院、南西の裏鬼門は報恩寺を配し、邪気封じをしたといわれている。江戸城などと同じように方位を気にして築城されたのである。

千手院や報恩寺は築城前からある真言宗の古刹である。床几山から亀田山を望み築城位置を決める際に、堀尾吉晴親子は千手院や報恩寺の方位を確認し、鬼門封じ



をしたのではないかと思っている。

陰陽五行では冬至の方位となる北と夏至の方位である南についても、陰陽が始まる方位として大切にしている。そのためか、城の真北には、富田城下広瀬から洞岳寺を移し、真南に位置する圓城寺も同じく広瀬から城安寺を移転し開山したことも方位の縁起を気にしてのことであろうか。

右は圓城寺庭園の全景である。庭園は客殿の北側に広がる枯山水様式である。庭の中心は六角地蔵燈籠、その左右に大きな伏石と井桁が据えられている。



圓城寺庭園全景

寺院庭園で多用される神仙蓬莱思想の石組み、三尊石や須弥山石などは見あたらない。

庭の北東端にはこの庭では唯一となる立石が据えられている。蓬莱石であろうか。庭木のクロマツや伏石の配石、飛石の打ち方などは、他の出雲の庭と同様な作庭手法が取り入れられている。

## 6 六角地蔵燈籠は石幢文様

圓城寺の六角地蔵燈籠は、六地藏を陽刻した幢身の上に日月文様の火袋が設えた希有な石燈籠であると考えている。

### ① 石燈籠の竿

この地藏尊は、石燈籠では竿と呼ばれている石柱に陽刻されている。右は円成寺本堂の木製の燈籠である。竿とは、このように火袋を支える細く長い柱をいう。石燈籠の竿が太いのは、重い石造の火袋や笠などを支えるためであり、あくまでの燈籠の付属物であり添え物である。竿が太くなったことから、献上者の名や祈念日などを石彫するのである。石燈籠の主役はあくまでも火袋である。



仏前の燈籠

このように考えると、六地藏が陽刻されている石柱は竿とは異なるものと判断せざるを得ない。

正確に言えば、圓城寺の六角地蔵燈籠は、いわゆる石燈籠ではないと考えている。

### ② 石幢の地藏尊

松江市の菅田庵庭園にある地藏石燈籠と呼ばれる石造物は、火袋(龕部)に地藏が陽刻されている。これと似た石造物は全国に多数残されており、地藏石幢と呼ばれている。近年は石幢という言葉がわかりづらいと言うこともあって、「六地藏石燈籠」と通称されているところが増えている。



菅田庵 地藏燈籠

### ③ 石幢とは

最初に石幢の由来を整理する。

石幢は、鎌倉・室町時代に多く作られたという。右は南あわじ市に保存されている六面石幢である。国立文化財機構の紹介では「石幢とは仏堂内を飾る幡(はた、バン 法要の場などを供養する旗)を六または八角に組み合わせた石造物」とある。仏堂内の仏具であった石幢が屋外に据えられるようになったのは、室町時代以降で、地藏信仰の広がりとともに龕部(がんぶ)に六地藏を陽刻したものが各地に広まったという。

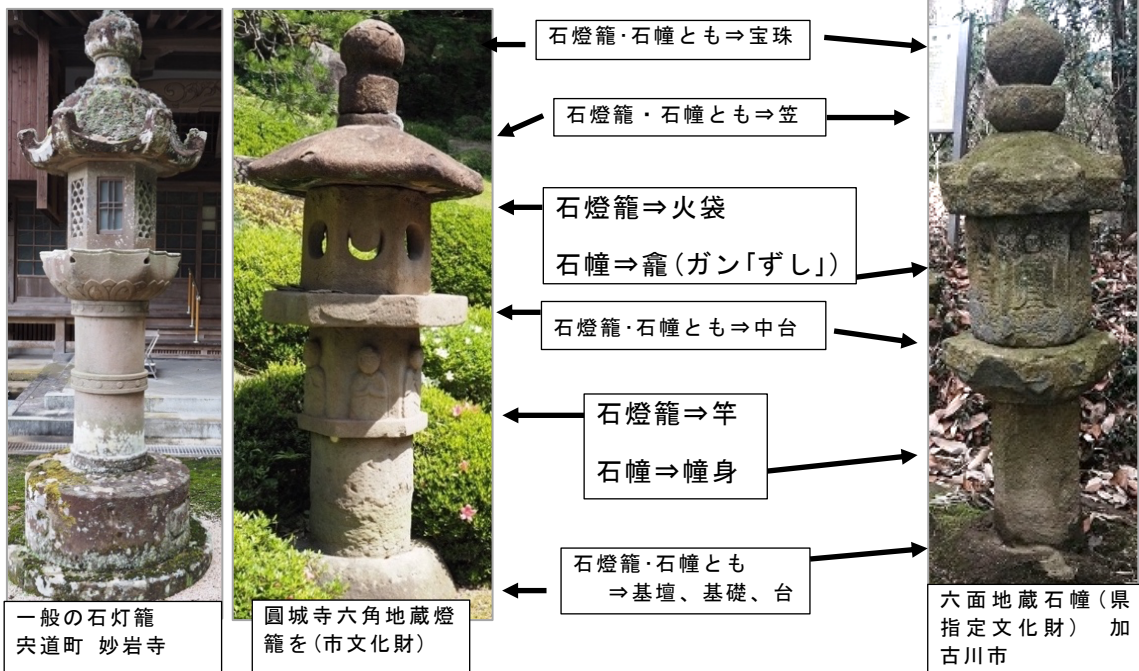
しかし、出雲部をはじめ山陰では見ることが少ない石造物である。これまでに観察したのは、菅田庵、八雲本陣だけである。



六面石幢(有形文化財)南あわじ市

### ④ 石燈籠・六角地藏燈籠・六地藏石幢(六地藏燈籠)

圓城寺の六角地藏燈籠を一般的な石燈籠と比較整理した。



上の比較図も見ても、圓城寺石燈籠の意匠の特異性がわかる。

圓城寺の六角地藏燈籠は、石幢と燈籠のそれぞれの意匠を取り入れた希少な石造物だと思っている。

### ⑤ 六角地藏燈籠の火袋

石燈籠の火袋に月と太陽をあらわす「日月(じつげつ)の透かし」を入れることは多い。火袋が明るく輝くことを願っての意匠である。そのためか月は、右のように一番明るく輝く南中時の姿を彫り込むのが一般的である。南の空高く月が上がっていることを喜ぶのである。

ところが、六角地藏燈籠の月の透かしは影の部分が上にな



南中頃の上弦月  
松江市八雲本陣庭園



る特異な形である。天空の月の動きは図に示したので対照すると解りやすい。

この不思議な月の透かし文様はどこかの解説で見たことがある。いつかは行ってみたいと願っている桂離宮の紹介記事である。

月を水盤に映して楽しむ浮月の手水鉢のある笑意軒、その船着きにある火袋と笠のだけの燈籠である。日月文様の左は、星をあらわし、三光燈籠と呼ばれている。



桂離宮 三光燈籠 日・月・星で三光



圓城寺の六角地藏燈籠の火袋とそっくりの意匠と思っている。圓城寺燈籠の火袋は、六面に丸い太陽と月と星が表現されていると思うとさらに興味が深まる。

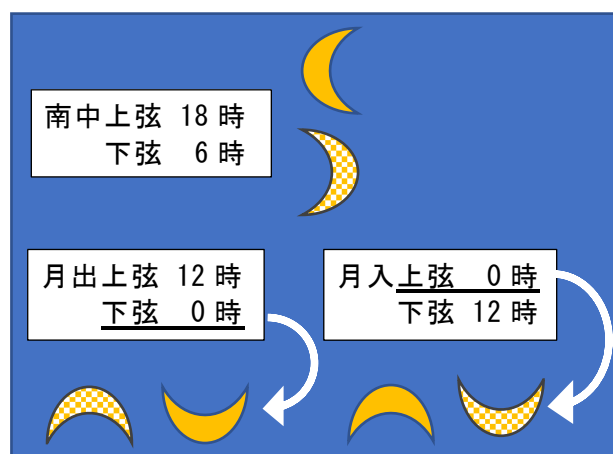
しかし何故、月の文様については不思議で一杯である。

上弦の月だとみるなら月が西に沈む直前の真夜中、下弦の月とみるなら月が出た直後の真夜中である。

石幢の六地藏とこの月の文様は関係があるのか。わざわざ石幢と石燈籠を複合した石造物にしたのかを考えると人はどんな職業の人だったのか。謎解きは始まったばかりである。

さらには、この六角地藏燈籠を一番大切な場所に置き、守り続けた人びとの思いも探っていければと思っている。

二方向から火袋を眺める  
左:客殿から北を眺める⇒月を挟み両側に日  
右:北から客殿を眺める⇒満月を挟み左が星。右が太陽



## 7 六角地藏燈籠のタイムライン

六角地藏燈籠は、圓城寺の開山にあわせて建立されたものではない。開山の30年以上前の慶長九年には作られていた。

生い立ちを探るとますます謎が深まる。まず、この謎解きのため、六角地藏燈籠に関するタイムラインを整理した。

1600年(慶長5) 堀尾吉晴 浜松城主から富田城に移り松江藩治める

**1604年(慶長9) 六角地藏燈籠完成**(竿・幢身に「慶長九年」と石彫)

1607年(慶長12) 松江城築城開始

1611年(慶長16)正月 松江城完成 白濁・末次⇒二郷あわせて松江と命名  
1611年(慶長16) 堀尾吉晴 瑞応寺建立(天倫寺付近) 春龍玄済を浜松天徳寺からを招き開山  
1611年(慶長16)6月 堀尾吉晴没  
元和年間(1614~1625) 春龍禅師退隠し、意宇郡乃木村隠栖(庵を結ぶ)  
1633年(寛永10) 堀尾忠晴 没 小浜藩から京極忠高入封  
1635年(寛永12) 瑞応寺を移転「鏡湖山圓成寺」開山 堀尾家追善、忠晴の廟庭園作庭?

ここでは、タイムラインにそって燈籠の作製地、作製依頼者、設置場所等の謎解きを試みる。

- ① 作製場所 ・ 来待石造であることから、出雲で制作
- ② 作製依頼者 ・ 出雲の外から来た者であるが、堀尾氏の可能性は低い  
・ 出雲には無い石幢形石灯籠を知る者  
・ 火袋の三光文様(日・月・星)を知る者
- ③ 設置場所 ・ 石幢は仏堂内に据えるのを原則  
・ 屋外に据えるとしても寺院・庵などの宗教的敷地

春龍禅師が退隠して、現在の円成寺の敷地に庵を建立し隠栖したのが、元和になってからである。やはり、堀尾氏が松江城築城したこととは、異なる次元で、この石地蔵はまつり続けられていたと考えることができる。

この地に江戸初期まで善光寺があったとの伝承も残っている。現在の善光寺は、1キロメートルほど南にあるが、寺の縁起によると、元は圓城寺山にあり、江戸初期に西忌部町の福王寺と合併し、現在の地に移転開山したとある。善光寺の山号は弍碕山であり、福王寺元の地「弍碕」の名を使っているので寺の合併は事実であろう。

これらのことから、

- ① 圓城寺山から善光寺が浜乃木に合併移転
- ② 六角地蔵燈籠建立
- ③ 春龍禅師退隠、圓城寺山に庵を結び隠栖 六角地蔵燈籠残置
- ④ 圓城寺建立 客殿庭園の中心に六角地蔵燈籠を配置(この時井桁整備)

六角地蔵燈籠のタイムラインについては、少し整理できたと思っている。

しかし一番に解明したいと思っていた「誰が何のために」という謎は、残されたままである。

## 8 六角地蔵燈籠の本歌

六角地蔵燈籠は来待石製の燈籠としては、他に類を見ない唯一無二の意匠であることは何度も述べた。

その理由は、出雲地方の社寺や民家に無数に点在する来待石燈籠を調べた中では、六角地蔵燈籠と同じ意匠の燈籠を見つけることができないからである。謎多き石燈籠である。

石燈籠の「本歌」という言葉がある。刀剣などでも使うようだが、最初に作られたオリジナルを言う。

例えば、来待石製で最も多い石燈籠は春日形である。火袋に鹿の絵が陽刻されているからすぐに見分けられる。本歌は、奈良の春日大社奥の院に大切に保存されている。その本歌を見た人びとが石工に依頼し、同じ意匠の石燈籠を作り続けたのである。

先に述べたとおり、地蔵形石幢は、室町時代には各地で作られたとの記録がある。先に紹介した菅田庵の六地蔵燈籠は本歌を探ることが容易と考えている。

しかし、圓城寺の六角地蔵燈籠の本歌はどこか想像することができない。石幢と石燈籠との合作と言うだけでなく、石燈籠の竿を龕部した特異な意匠を作った理由がわからないのである。

誰が何のため作ったか、特異な意匠の六角地蔵燈籠について謎解きを続ける。

## 9 六角地蔵燈籠と井桁

圓城寺庭園の中心は、井桁と六角石燈籠であることは先に述べた。

ここでは、庭の井桁についてその役割を考えて見たい。

枯山水様式の庭で水を表現するため、手水鉢を置くことが多い。出雲では天水と呼ぶ巨大な手水鉢を石燈籠とあわせて庭の中心に据える。

一方、井桁も水を象徴するものでありながら、出雲の庭に井桁(井戸)を据えることは少ない。

しかし、驚くことに城を挟んで北に建立された洞岳寺庭園にも井桁があるのである。松江城築城にあわせて、城の南北を治めるかのように建立された寺がある。

庭の井戸(井桁)に何か隠された伝承があるのでとはと調査を続けているが、解らないままである。

手探りが続く中、圓城寺庭園の井桁と六角地蔵燈籠の成り立ちについて仮説を立て、検証してみたい。



上:圓城寺庭園  
客殿から眺める景趣  
・井桁(井戸)と六角地蔵燈籠  
下:洞岳寺庭園 松江市奥谷町  
客殿から眺める景趣  
・龍虎仕立てクロマツとサツキと井桁(井戸)



出雲でも庶民に地藏信仰が広まり、村の境界には路傍の六地藏が多く残っている。隠岐に流された小野篁の「あごなし地藏」の伝承を聞くことも時折ある。

井戸は異界の入口という俗信がある。小野篁の足跡を調べて、京都の六波羅に出かけた際に、小野篁像のある六道珍皇寺の井戸と地獄絵図を鑑賞した。

右上の井戸は、京都六波羅の六道珍皇寺、庭の中央に井戸と小さな石地藏が据えられている。地獄への入口となる井戸で小野篁が地獄に通ったとの伝承が残る。

地藏菩薩と地獄について、少し補足しておきたい。右の絵図は、京都の寺で撮影した地獄絵図である。地獄で地藏菩薩が夭折した子どもたちを救っている姿が描かれている。祖母と外出し路傍の石地藏に出会うと、せかされて一緒に拝んだものである。俗信ではあるが、心地よい安心感が残ったことを今でも思い出す。

タイムラインで検証したとおり「圓城寺開山前から、この地には既に井戸と六角地藏燈籠があった」と仮定すると一つの解が出るように思っている。庶民信仰の中では、地獄で子どもたちを救う地藏菩薩と冥界につながる井戸は、小野篁の伝承と共に語り継がれていたと考えるとおもしろい。

本山は城主堀尾忠晴が没し、堀尾家が断絶した後堀尾家追善のため、建立して寺である。開山後も庶民の地藏信仰の象徴であった六角地藏燈籠を大切に扱い、移転することなく、庭の中心としたと考えると、当時の情景が浮かび上がってくるような気になってくる。

井桁(井戸)については、城の北の洞岳寺庭園と対照し、さらに検討を続けてみたい。城下を建設するときにはたくさんの井戸が掘られ、今も残り利用されているものも多い。南北の寺院の井戸は、城下に豊かで清浄な水を願う「祈りの井戸」ではないかと考えることはできないのだろうか。

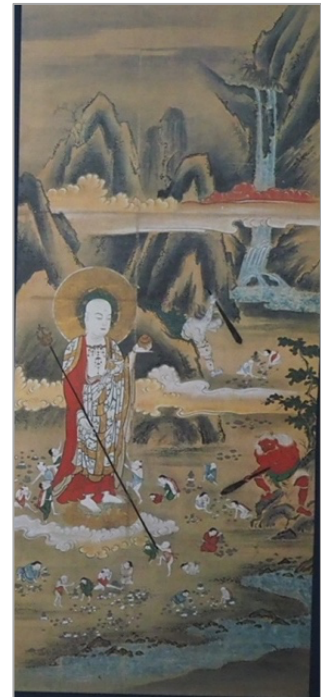
## 10 景趣絶佳を再発見

出雲流庭園と寺院庭園はそれぞれ異なる意匠で構成されているが、「ここぞ」という庭の見せ場には石燈籠が据えられている。出雲の庭の景趣絶佳である。

本稿では、圓城寺庭園のシンボルである六角地藏燈籠の謎解きに始終し、この庭に秘められた魅力の探究がおろそかとなった。何故この石燈籠を庭の中心に据えたのかなど、さらに解明を続けて行く必要があると考えている。



左上：京都六波羅  
六道珍皇寺  
小野篁が地獄に出かけたとの伝承が残る井戸  
左下：地獄絵図  
夭折した子どもたちを救う地藏菩薩  
京都六波羅 西福寺



一般には、寺院庭園では神仙思想などを取り入れた鶴亀の庭などの池泉式庭園が多いが、出雲地方では少ない。この庭を見ていると出雲市の康國寺庭園との類似点に気がつく。同じ臨済宗妙心寺派の寺であるからだろうか、

康國寺庭園の唐金形石燈籠と六角地藏燈籠、その意匠は全く異なるが、石燈籠に託す秘められた願いがあるとすれば何か、このことについても考えを深めていきたい。

さらには、松江城を挟んで南北に建立された寺院の庭に共通する井桁も謎を解明すると面白いと思っている。ここでは、六角地藏燈籠と井戸から小野篁伝説に行き着き、私説の推論を展開してみた。賛否は分かれるとは思っているが、謎解きには大胆な提案も必要では無いかと考えている。

本稿では、庭づくりに関するたくさんの仮説を立て検証してきたが、資料不足、検証不足など論拠が弱いものも多い。

これからも歴史民俗の分野も含め、多様な面からの検証を続け、円成寺庭園をはじめとした出雲の庭園について謎解きと魅力を探求していきたい。

もうひとつ取り組むべき課題がある。

出雲燈籠の名で日本各地の庭園や社寺に納められていた、来待石燈籠の行く末である。

出雲特産の来待石は、軟石であり脆弱な材質であるとの評価が一般的である。しかし、ここの六角地藏燈籠は、石彫されている文字は読むことができなくなっているが、400年以上経過したとは思えない程、損傷は少ない。来待石でも風化に強い硬質の石質だったのか、それとも風雨や凍結を防ぐための保存対策が取られていたのか。

このことについて解明できれば、来待石の長期保全の可能性についても展望できると期待している。引き続き調査分析を続けてみたい。

#### 参考資料

- ・写真：三光燈籠及び石幢については、宮内庁、文化財関連 HP から複写  
その他については、筆者が撮影
- ・円成寺縁起：円成寺作成パンフレット、島根県大百科事典(円成寺)
- ・善光寺縁起：しまね観光ナビ:善光寺、全国善光寺会 HP